

## 彙報

### 二〇一〇年度秋期東洋学講座講演要旨

(東洋文庫とアジア4—東洋文庫は

日本のアジア研究をいかにリードしてきたのか)

第五二〇回 一〇月一八日(月)

### 日本人のイスラーム理解

—5つのキーワード—

東洋文庫研究部長 佐藤 次高  
早稲田大学教授

### 東洋文庫のアラビア語・ペルシア語・

トルコ語史料

一九六〇年代から榎一雄、護雅夫、嶋田襄平などの先駆者による組織的な収集の開始。

文部省の科学研究費補助金の活用。古典的な一次史料の収集を中心とする。

現在、アラビア語史料約二五〇〇〇冊、ペルシア語史料一六〇〇〇冊、トルコ語史料二〇〇〇〇冊。我が国ではもっとも充実した史料を収蔵。他の大学・研究機関が所蔵する

彙報 佐藤

史資料の情報を統轄する資料センターとしての機能を果たすことをめざす。

#### 1. 神(アッラーフ)と人間の区別

万物の創造主である唯一の神 *Allah* と人間との区別。預言者ムハンマドを通じてアラビア語で人類に啓示された神の言葉の集成がクルアーン *al-Qur'ān* (全一四章)。

ムハンマド・アブラハム、モーセ、ノア、ソロモン、ダビデ、イエスなどを継承する最後の預言者。預言者だけが神の言葉を理解し、これを人類に伝えることができる。

↓人間より優れた資質を授けられた預言者。しかしこの預言者もあくまで市場を歩くただの人間に過ぎない。したがってイスラーム社会に「聖職者」はそもそも存在しない。たとえばイランのホメイニーはよく聖職者と表現されるが、どんなに徳の高い学者でも「聖なる知識人」ではない。

#### 2. 「弱い男たちの書」

シリアのダマスクスにある書店での出会い。

*Im al-Jawzi* (d. 1201), *Kitaab al-Du'afa*, 『弱い男たちの書』  
弱い男・悪い先生についてしまった人、記憶力の悪い人、虚言癖のある人。

知識の伝達・教育…どの学院(マドラサ)で勉強したか

ということより、誰に師事して勉強したかが問われる社会。どの人名事典（死亡録）を開いてみても、誰に師事して、何を勉強したかが克明に記されている。

アラブの学問…法学、神学、伝承学、コーランの解釈学、文法学、歴史学

外来の学問…哲学、医学、数学、代数学、幾何学、光学、化学、地理学

とくにアラブの学問の基礎…預言者の言行（スンナ）や歴史の事件を伝える伝承（ハディース）… $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ と伝えられる伝承者の鎖。このなかに「弱い男」が混じっていないか？史料批判を簡便化するための人名事典。

3. イスラーム法（シャリーア）は一つではない  
九世紀前後、コーラン、ハディース、類推（キヤース）を基礎とするイスラーム法 *Shari'a* の体系化。慣行（*アード*）を取り入れた判決。  
シャーフイー派、ハナフィー派、ハンバル派、マリーク派（以上スンナ派）、シーア派などに固有な法体系。たとえばシャーフイー（d. 820）『母（根源）の書』。 *Fi Shafi'i, Kitab al-Umm*. 礼拝、断食、巡礼などにかかわる「儀礼的規範」と婚姻、相続、契約、裁判、犯罪などにかかわる「法的規範」からなる。

は、旧約聖書のなかの預言者と魚との密接な関係もうかがわれる。

### 5. 奴隸軍人（マムルーク）の活躍

イスラーム…奴隸の存在を否定しない。親切的扱いの教え、解放の勧め。

(1) 生まれつきの奴隸（アブド *abd*、マムルーク *mamluk*、ジャーリヤ *jariya*）子供の身分は母親の身分にしたがう。母親が奴隸であれば、父親が自由人であっても、子供は奴隸。ただし父親が認知すれば、その時点で自由人となる。

### (2) 戦争捕虜

異教徒の戦いの捕虜を奴隸とすることができる。ムスリムを奴隸とすることは不可。債務奴隸はなし。奴隸がイスラームに改宗しても、解放されない。

「女奴隸に教育を施し、奴隸身分から解放し、結婚した者には天国で二倍の報いがある」（ハディース）。奴隸の教育、自由人との結婚、蓄財の権利など。

九世紀以降、トルコ人、スラヴ人、アルメニア人、ギリシア人、チェルケス人などを奴隸（マムルーク）として購入。騎馬戦士として養成。異教の世界からきたマムルーク

一つの王朝・国家（ダウラ）に複数のイスラーム法。裁判は被告人が属する法学派のシャリーアによって裁かれる。どの国家にも共通する唯一のイスラーム法が存在したとの誤解。統一性ではなく多様性が原則。

### 4. 誰が聖者（ワリー）を認定するのか？

ワリー *wali*：「神の友」、「神の近くに人」、「スーフイー聖者」

一二世紀以降のローマ・カトリック教会…教皇による聖者の認定（聖別）

イスラームでは、聖者を認定する権威者は定められていない。カリフやスルタンではなく、集団や個々人の意思によって認定された。

バルフ生まれの聖者スルタン・イブラーヒーム・ブン・アドハム（七七七／八年頃没）没後、約二世紀半をへて徐々に高徳な聖者スルタン・イブラーヒーム像がつくられる。アッバース朝政権に反抗するバルフの学生↓逃亡↓礼拝と瞑想に日々を送る聖者。

地中海沿岸とベルシア湾に住む魚スルタン・イブラーヒーム（髭のおやじさん）。

身近な聖者と魚の関係。スルタン・イブラーヒーム伝説と魚の分布との相関関係も認められる。さらにその背後に

に軍事の主力をゆだねる。イスラーム文明に固有な人材の活用法。一九世紀はじめまで続いた社会的慣行。

### 第五二一回 一月八日（月）

#### マンガ家たちの中国近代史

#### ——東洋文庫所蔵の漫画資料を読む——

東洋文庫研究員 瀧下 彩子

東洋文庫の所蔵資料に漫画がふくまれていることは、一般にはあまり知られていない。モリソン文庫の目録には、一八四一年にロンドンで創刊された時事漫画雑誌「*Punch*」や、その日本版「*Japan Punch*」中国版の「*The China Punch*」などの誌名が見える。また、近年の資料としては、一九七一年に刊行された藤子不二雄Aの『劇画・毛沢東伝』（漫画サンデー増刊号）があり、文化大革命が日本の大衆文化に与えた影響を知る上で興味深い。

これらの漫画資料のうち、『国家総動員画報』は日中戦争時期の中国で刊行されたタブロイド判で八面からなる漫画新聞であり、三日おきに刊行された。東洋文庫ではその創刊号（一九三七年二月）から五四期（一九三八年一月）までを所蔵している。執筆しているのは、一九三七年

当時の有名な漫画家たちであり、当時の漫画界の動向や漫画家がいかなる抗日のメッセージを発信したのかなどを観察することができる。

中国の漫画は、イギリスやフランス、のちにアメリカや日本の影響を受け、上海と広州で発達した。一九三〇年代になると、両地では様々な漫画雑誌が刊行され、多数の漫画家が活動した。一九三七年に日中戦争が勃発すると、上海では漫画界救亡協会が設立され、ここに上海の漫画家たちが結集して『救亡漫画』を刊行する。当時の上海には抗戦を訴える刊行物が多数存在したが、一月に上海が陥落すると、『救亡漫画』をふくめ、そのほとんどが停刊し、多くの文化人が内陸部や広州、香港などに避難した。上海から広州に避難した漫画家たちは、広州で活動する漫画家と連合し、一九三七年一月に『国家総動員画報』を創刊した。ちなみに、郭沫若が主催した『救亡日報』が広州で復刊するのが翌一九三八年一月一日であったことを考えると、『国家総動員画報』の立ち上げは極めて迅速であったと言いうことができる。これは、運営と編集に携わったメンバーの中に、魯少飛、黃苗子といった国民政府宣伝部に人脈を持つ漫画家が存在したためでもあった。黃苗子は、妻の郁風（郁達夫の姪）を通じて中国共産党の抗日文化工作を担った第三庁（庁長は郭沫若）とも連絡を持っていた。

『国家総動員画報』の啓蒙的な抗日漫画や、軍閥に支配される中国人民の窮状を描いた漫画には、『救亡日報』と同質のメッセージを読み取ることができる。『国家総動員画報』は、一九三八年一月に広州が陥落すると一時刊行を停止し、その後一九三九年に復刊したことが文献などで確認できる。

漫画による抗日活動としては、『国家総動員画報』のほかに『漫画宣伝隊』をあげることができる。『漫画宣伝隊』は、一九三七年一月に、漫画家葉浅予が国民政府宣伝部の協力を得て組織し、南京、武漢、重慶などで大規模な展覽会をおこなうなど、華々しい活動を展開した。隊長の葉浅予は、魯少飛とともに一九三〇年代の上海漫画界をリードした漫画家であり、アメリカナイズされたスマートなコマ漫画を得意とした。今日の中国では抗日漫画活動の象徴的人物として知られている。広州の漫画家廖永兄は、広西に疎開していたことから『国家総動員画報』に参加することができなかったが、この『漫画宣伝隊』に参加して大幅の連続漫画を製作している。しかし、一九四〇年に国民政府と中国共産党の関係が悪化すると、第三庁の文化工作活動にもかげりが生じ、七月には『漫画宣伝隊』も解散した。中国の漫画史においては、日中戦争時期の抗日漫画についてとりあげる際、その活動が一九三七年から一九四五年

の戦争終結まで持続したかのように語られることが多い。しかし実際には、大規模な抗日漫画活動が展開されたのは一九四〇年までであった。沿岸大都市の陥落によって刊行の場を失ったことと、国共合作の破綻によって文化工作にならぬ第三庁への資金提供が停滞したことが原因であり、漫画家達は生活と執筆活動を両立することができなくなったのである。魯少飛は妻子を連れて新疆から蘭州へと放浪し、廖永兄は生活のために漫画とは無縁の仕事が続けた。

左翼芸術家連盟に参加していた張謐のように、中国共産党と関係の深かった漫画家の中には延安におもむき、『解放日報（延安版）』誌上で抗日漫画製作を続ける幸運にめぐまれた者もいる。また、日本占領地域に残留せざるを得なかった李凡夫のような作家は極めて不運なケースだった。広州を代表する漫画家であり、上海の葉浅予と並び称されたコマ漫画の名手である李凡夫は、一九三八年当時、コミカルなタッチの抗日長編漫画で注目を集めた。だが、広州と香港の陥落後、汪精衛系の御用新聞に作品を連載したことから、戦後は漢奸のレッテルをはられ、中国での活動の場を奪われた。

通常、大衆文化は、連続する日常生活の中で発信者（たとえば漫画家）と受信者（同、読者）の相互作用によって醸成されていく。そこに戦争という非日常要素が加わった

時、相互作用には劇的な変化が生じ、発信者と受信者の双方が変化の奔流に巻き込まれ、ゆるやかな醸成作用からかけはなれた変化の異相が形成されていく。漫画という、メッセージ性の強いメディアをめぐる、その作品と作家が日中戦争の八年間にたどった変化を観察することによって、日中戦争が中国におよぼした社会変容がかいま見えてくるのである。

#### 第五二二回 一月二日（月）

#### 戦後日米間のなかの中国研究と東洋文庫

東洋文庫 研究顧問  
国立公文書館 平野 健一郎  
アジア歴史資料センター長

一九四五年八月一日、日本の敗戦によって終戦を迎えたアジア・太平洋地域における戦争は、日本が中国大陸で始め、日本が米國、中国を含む連合国に敗れた戦争であった。戦後、再スタートした日本における近現代中国の研究は、対象である中国社会の同時代的な変化・発展とはもちろん、米國における研究動向とも切り離しがたい関係を結ぶ宿命にあった。戦後日本の中国研究を規定した日・中・米という三者関係、その結節点の一つとして顕著な位置を

占めたのが東洋文庫である。

日・中・米の三者関係は、動かしがたい地理上・歴史上の関係であると同時に、現実世界の国際政治経済関係として変化を続ける、重大な関係である。戦後六五年、この三者関係との緊張をはらみながら展開してきた近現代中国研究は、大勢として、きわめて刺激に富んだ、大きな学問的成果を挙げたと集約することができのではないだろうか。もちろん、大きな変動を続ける中国社会そのものを研究対象とする以上、紆余曲折があり、混迷があり、現在進行中で、結論が得られたわけではないが、意欲的に、人々の世界理解、人間理解に貢献してきたと結論できよう。講演者は中国研究の中心に位置する者ではないので、管見の及ぶかぎりであるが、東洋文庫を覗き窓にして、日・中・米の三者関係のなかに置かれた戦後日本の近現代中国研究の歴史を概観してみたい。「近現代中国」とはアヘン戦争以後の中国を指すものとする。以下、「中国」「中国研究」と省略する場合がある。）

敗戦の灰燼がようやくおさまりかけて、日本の中国研究が再スタートを切ったのは一九五二年であったといえる。サンフランシスコ講和条約が締結された年であるが、二年前の朝鮮戦争によって、冷戦はアジアにおいて熱戦となり、米中対立は決定的となっていた。一九五二年、ハーバード

しかし、このような動きを「アメリカ帝国主義」による中国研究支配と呼ぶのは当たらない。日本の近代中国研究の成果を撰取しようとしたフェアバンク先生の意図は別のところにあった。中国の国共内戦のなかで、いわゆる「中国の喪失」を経験し、一九五二年にはマッカーシズムの嵐のなかにあったフェアバンク先生は、アメリカ国民が中国で失敗を繰り返さないために、研究と教育の面であらゆる努力を重ねたのである。実践的な意図による研究至上主義がその信条であったのであり、六五年の時間の幅での評価は、当時のそれとは異なっており、然るべきであろう。

一九六〇年の日米安保改定反対闘争は学生、大学院生に高揚と空虚を残して終わったが、中国研究の世界には、間を置かず、その余波とみなされたものが及んだ。いわゆる「アジア・フォード財団問題」である。一九六二年、アジア財団、フォード財団が、中国研究では東洋文庫、東南アジア研究では京都大学を選んで財政支援をしようとしたのに対して、東京、京都の助手、大学院生が受け入れに反対する運動を展開した。アジア財団はCIAと関係があるといみなされており、援助は米国のアジア政策の一環と疑われたが、安保闘争同様、反米運動にはならなかった。この運動は研究者の世界に限られ、ジュニアとシニアの研究者の間の、世代間対立の様相も呈したが、結局、研究条件の改

大学の中国研究者、ジョン・K・フェアバンクが戦後初めて来日し、半年間東京大学東洋文化研究所に通って、日本の中国研究の文献目録を作成する作業を行った。パートナーに選んだのは坂野正高先生であった（フェアバンク・バンノ・ヤモトの『日本における近代中国研究』は一九五五年にハーバード・イェンチン研究所から刊行された）。フェアバンク先生はすでにハーバードで本格的な中国研究と中国に関する教育の体制づくりに乗り出しており、また、『アメリカ合衆国と中国』を出版して（一九四八年）、米国人の中国理解の増進に大きく貢献していた。この日本滞在期間中に日本の中国研究の状況を観察し、日米間の学術交流の可能性を探ったものと推測される。一九五四年に、ロックフェラー財団の援助により、東洋文庫に近代中国研究委員会が設置された。市古宙三先生が長い間この委員会を主宰されて、近代中国研究に必要な文献の収集整理から研究体制の確立に大きな貢献をされたことは周知のとおりである。一九四九年の中華人民共和国の成立をはさんで、日本においても近代中国への関心が高まり、複数の研究発展経路がありえたかもしれない。そのとき、アジアの冷戦が盛んとなり、日本は米国を基軸とする単独講和を選んだ。そのような時代変化のなかで、東洋文庫に近代中国研究の研究体制が確立されたことの意味はやはり大きい。

善を求める動き——研究のインターナショナルリズムに通じる傾向——と研究のナショナルリズムを求める動きとの間の分裂で終わったということができよう。

その間、中国大陸では大躍進から文化大革命へと大きな変動が続いた。変らなかつたのは、中国研究者が中国へは行けない、という基本条件で、その点では日本もアメリカも同じであった。一九五〇年代から六〇年代にかけて、アメリカの研究者から日本の研究者への同協力的な協力・共同が求められたのは、中国という巨大・不思議物体を外からなんとか理解しようという願望からであったといえよう。日本側にも、アメリカに集まる資料・情報と、社会科学の方法・知見を中国理解に利用したいという願望があった。両国のそのような願望から、国際的な研究共同の場として東洋文庫にスポットが当てられたと考えられる。中国研究を含むアジア研究における日米間の国際的協力の頂点が、一九六七年八月にミシガン大学を会場に行われた国際東洋学会会議であった。日本から中国研究者、東洋学者の一大代表団が参加し、フェアバンク先生ら、アメリカの中国研究者、アジア研究者がホストを務めた。

この大会で特別セッションが設けられたのが、ヴェトナム戦争に関する国際的な自由討議のためであったのは象徴的である。中国、日本を理解するために地域研究の方法と

実践を深め、「アジア研究」へと進化したアメリカのアジア研究が、ヴェトナムにおいて、自国の戦争に虚をつかれる形となった。戦前の日本における中国研究の成果を活用しようとしたアメリカの中国研究、アジア研究が、戦前の日本の中国研究と似たパターンに落ち込んだのである。しかし、フェアバンク先生ら、アメリカのシニアのアジア研究者は、ティーチ・インなどで、若い研究者の批判に真摯に反応し、「憂慮するアジア研究者」集団に集まった新世代の研究者たちは、戦前の日本の失敗から学ぼうとした。ヴェトナム戦争の終結に向けた米国政府の戦略から米中国交正常化が実現し、日本政府もそのあとを追った。一九七二年、米中間には「上海コミュニケ」が結ばれ、中国大陸との知的交流、教育交流、学術交流が行われるようになり、アメリカの中国研究者、学生が堰を切ったように中国を訪問し、やがて、長期の現地調査を実施するようになった。日本も同様であるが、持ち前の冒険心で現地調査を敢行するアメリカ人研究者には、今なお遅れをとっているように思われる。改革開放以後、中国からはとみに大量の留學生が日本とアメリカに向かうようになったが、アメリカの引力が次第に強さを増していることは否定しがたい。中国から米国へ、大学院留学、研究留学と進み、アメリカで中国研究に従事する中国人研究者の数も目覚ましい勢いで増えて

いる。日本、台湾、香港と、かつてはアメリカと共に中国を外から研究する協力者であった周辺が、米・中によってバイパスされるのはやむをえないことかもしれない。この間、東洋文庫はよい意味での研究至上主義の灯火を掲げ続け、一九七〇年代以降、どちらかといえば静かに中国研究図書館としての実力を蓄えてきたといえよう。書籍・資料の購入と書誌情報の整備を着々と進めながら、中国大陸からの書籍・資料の購入と書籍交流を充実させ、その一方、台湾との図書館交流を着実に継続してきた強みがある。二〇〇三年度には、研究部の改組に伴い、近代中国研究委員会から近代中国研究班に変わったが、以前と同様に、中国の資料を中心とした近代中国研究に重厚な成果を挙げている。他方、東洋文庫としては初めての現代中国研究が、超域アジア研究現代中国研究班（政治研究グループ、経済研究グループ、国際関係・文化研究グループ）の活動として行われるようになっていく。現代中国研究資料室も設置された。そればかりか、IT時代といわれる今日以降、東洋文庫が新たに重要な役割を果たす必要性和可能性が生まれていることは、最後に述べるとおりである。

最後に、戦後六五年間の中国研究の成果を簡単に挙げてみよう。アヘン戦争以後の歴史変化、特に辛亥革命と中華人民共和国成立の根拠の解明は国際的に大きく進んだ。近

代化、民主化について、中国に即した議論の進展により、理解が深まった。伝統と近代を関連づけて考察する方法も成果を生んでいる。中国という巨大な地域を如何に把握するかという方法論も深まってきた。これらの成果の多くは、日本とアメリカの中国研究者の協力と競争が生んだものであり、そこに中国の研究者の参入も見られるのが最近である。

そうした成果を生んできたアメリカの中国研究と日本の中国研究の主な特徴を、講演者個人の見解で、数点にかぎって挙げてみると、アメリカの中国研究は、研究者間の競争のなかから、特異な独創的研究を生み出すことを特徴とする。また、かつては中国研究に閉じこもらず、アジア研究へと広がって行ったように、今日では、グローバル・ヒストリーの枠組で中国を捉えようとする傾向が見られる。他方、日本の中国研究は、堅実な役割分担と着実な継承発展を特徴とする。研究者個人が意識するとなしにかかわ

らず、戦前からの中国研究を受け継いでいることが日本の中国研究の強みであろう。また、同じアジア人であることから、対象への深い共感を持つことができる強みもある。要するに、日本の中国研究はこれからも歴史研究をその骨格とし続けるであろう。

二一世紀に入って、日・中・米を含む国際的な中国研究は、IT化という新しい研究条件に恵まれ、急速にデジタル化し、グローバル化し始めている。東洋文庫も一部デジタル・ライブラリーとなる動きを見せ始め、中国研究者から歓迎されている。しかし、東洋文庫の真の強みは、デジタルな資料の横にも、日本の中国歴史研究の深い蓄積を体现する文献情報が整っていることである。今後、その強みはますますグローバルに発揮されるはずである。現に、東洋文庫はこのたび、ハーバード・イェンチン研究所ならびに図書館と新しい交換協定を締結する運びになった。